

鶏龍山断想

— 氷雨に煙る東鶴寺 —

10 月末の鶏龍山（ケリョンサン）は、朝から氷雨が降り、季節は鉛色の底に沈んでいた。万博会場の大田（テジョン）から西に車で1時間ほど行ったところに、鶏龍山国立公園（ケリョンサン クンニプコンウォン）がある。鶏龍山は海拔 845 メートルの霊山で、山々が連なり、その形が鶏のとさかに似ていることからこの名がつけられた。この付近には 20 を超える古寺が散在し、春には爛漫の桜が、秋には紅葉が連山を美しく染めあげる。

雨と霧に煙る参道沿いには、もみじや小ならが梢を上げ、黄や紅の葉が雨に打たれている。キム先生を先頭に、ILN（インターナショナル・ローヤーズ・ネットワーク）のメンバー 12 名は、東鶴寺へと向った。東鶴寺は臨西宗系の尼寺で、尼さんのたまごが修行に励んでいる。高麗時代に建立された由緒ある名刹である。われわれは、ソウルでの 2 日間のアジア地域会議を終え、短い見学旅行を楽しんでいた。

普通ならばとても無理だが、キム先生の特別の計らいでわれわれは庵主さんに会うことができた。

アンニョン・ハシムニカ（こんにちは）。

習いたての韓国語で、われわれは庵主さんに挨拶をする。

庵主さんは、目元が涼しい小柄で温容な方である。60 代をちょっと超えたくらいであろうか。作務衣を着てにこにこ笑っておられる。とても多年厳しい修行をしてきたとは見えない「普通の方」である。ちょっとした立ちふるまい、ゆっくりした息づかいにも庵主さんの穏やかな心映えが感じられる。

20 畳ほどの板の間に招じ入れられると、床から暖房熱が伝わって体が温まってくる。床下は石造りのムロになっており、そこで火を焚いて暖房をとっている。寒い中を歩いて来たわれわれにとっては、何よりのご馳走であった。

— 六根清浄 —

われわれの自己紹介が終わると、助手の尼さんが、ドライ・フルーツからできたようなお茶と、米菓子の様な茶菓を高杯に盛ってすすめる。ジョンが片手で茶碗を持ち上げ、無造作に飲もうとすると、庵主さんが穏やかにジョンをたしなめる。

そんなに急いで飲むものではありません。

キム先生が、庵主さんの話を英語に通訳する。

お茶は、まず目で色を見て、鼻で匂いをかぎ、耳のそばにもっていき耳に聞かせて、それからゆっくり味わうものです。

庵主さんの真似をして、わたしは、サフラン・イエローの茶の色を見、かすかな匂いをかぎ、茶碗の温もりを感じながら甘やかな味の茶を喫する。この作法は、おそらく仏教の「六根清浄」から由来しているのに違いない。

わたしはふと思いつき、キム先生に通訳してもらうのももどかしく、漢字で「六根清浄」とメモに書き庵主さんに渡した。庵主さんは、即座に、「清浄 眼耳鼻舌身意」と書き添えて、軽くなずきながらメモをわたしに返してきた。心というものは、精妙な機械のようなもので、外部環境を整え、食を節し、瞑想をして、やっと心の平安を得ることができる。だから、日頃良いもののみに接し、良いもののみを体に取り込まないと、わたしという小さな宇宙を浄化するのは難しい。このお茶は眼、耳、鼻、舌、身体を浄め、心を浄化するために飲むのだろう。

— 仮想現実の世界 —

ふとわたしは、先ほど訪れた万博のテクノピア館での体験を思い出した。

70mmの大型画面には、宇宙の大魔王と地球防衛隊との戦闘シーンが展開されていた。大魔王の立体画像が迫るにつれ、最先端の音響システムから発せられたすさまじい音響が耳を聳し、ターボ椅子の座席が上下左右にダイナミックに振動する。韓国語はまったく理解できないものの、あたかも、わたしは現実には飛行艇に乗り、大魔王と戦っているような錯覚に落ちている。

何という臨場感だろう！大魔王と追いつ追われつの抗争を繰り返すたびに、本当にスリルと恐怖感さえ感じる。わたしはレーザー砲を打ち込み大魔王に立ち向かうが、大魔王は逆に襲いかかってくる。

大音響が響きわたり、わたしの飛行艇は敵の攻撃にあうたびに振動し傾斜して悲鳴をあげる。悪夢の様な現実感……。現実と仮想世界との境界は曖昧になり、今や 500 年後の仮想世界がわたしには現実となって迫ってくる。

恐ろしい悪夢から逃れるため、ふとわたしは眼を閉じてみる。するとそこには、無意味な大音響とただ座席がガタガタ振動しているだけ。今までの仮想世界は一瞬にして消え、大魔王も、その手下の「火の犬」たちも一瞬にして消失する。

「眼」という感覚器を遮断すれば、目前にある筈の世界は、もはやわたしにとっては存在しない。心が「現実」を創り出し、「世界」を創り出している……。

ヒトは、感覚器を通して得られたイメージ世界の中で、各人の宇宙をつくっているだけではないか。眼を開いて見た世界が真実で、眼を閉じた世界が虚構などということはいえない。

どこにも真実とか実在などはない……。心と「現実」との関係は、何と微妙だろう。

— 「片手」の公案 —

ふと、我にかえると、皆が庵主さんに盛んに質問をしている。

朝は何時に起きるんですか？

朝は3時に起き、夜は9時に寝ます。

ここでは生徒たちは何年間学ぶんですか？

4年間仏教の勉強に励みます。

1日をどのように過ごしますか？

畑を耕し、瞑想し、仏典を学んで1日を過ごします。

われわれのメンバー中、キム先生、ジョン、シンシアはキリスト教徒だし、クナードはヒンズー教徒である。たあいのない質問だが、皆、好奇心にかられている。

ロコが庵主さんに尋ねる。フィリピンのロコは、弁護士だが国会議員としても活躍している。

「片手で手を打ったら、どんな音がするか？」という公案を聞いたことがあります。答は何でしょう？

キム先生が韓国語に翻訳しているが、キム先生自身、ロコのいう意味が分からないらしい。

片手でどうして手をたたけるんだろう？

キム先生は首を捻っている。何回か、ロコ、キム先生、庵主さんの間でやりとりがあり、どうやら庵主さんはロコの質問が分かったらしく、答えた。

片手で打つと、宇宙の息吹の音がします。

普段は饒舌な各国の弁護士たちも、この難解な問答に接して声一つない。

— 一期一会の出会い —

ひとときの団欒が終わると、庵主さんはわれわれを図書室へ案内してくれた。達磨法師のかげじくが壁に掛けられ、維摩経、華嚴経などの教典がところせましと並んでいる。生徒たちはここでひたすら仏典の修得に励む。

寺での食事は一汁一菜で、勿論、肉は食べない。わたしが弁護士修習をした籐堂老先生は、よく座禅をされたが、「肉食は、瞑想や心に悪い影響を及ぼす」、というのが持論だった。

うら若い乙女が、何を求めて早暁に人里離れた鶏龍山で修行に励むのだろう。豊かな現代社

会に背を向け、ひたむきに精神世界を求める動機は何だろう。テジョンで現代の粋を尽くした仮想現実の世界を見たわたしにとっては、ここでの伝統的な生活との対照があまりにも鮮やかに思えた。

やがて夕闇が迫り、われわれは東鶴寺を辞した。庵主さんは、寒い中をわざわざふもとまでわれわれを見送ってくれた。

カムサ・ハムニダ（ありがとうございます）。

わたしは庵主さんに深くおじぎをした。もう二度と庵主さんとも会うことはないだろう。短い訪問であったが、日々を国際ビジネスに追われる時間の裂け目に、心を洗う機会を得たことを、わたしはうれしく思った。